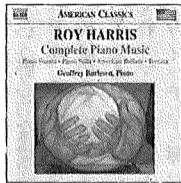


■谷口昭弘 (音楽学・音楽評論)

ハリスは、シリアスさ、重厚さを兼ね備えた、ヨーロッパ音楽の模倣でないアメリカのクラシックを確立した作曲家の一人で、コープランドとともに、映画音楽作曲家によってたびたび参照されてきた。そのピアノ作品を1枚に集約したのがこのアルバムである。《アメリカのバラード》やピアノ組曲は、その中でも親しみやすい作品で、素朴で無骨だったり、ブルージーな和音を使っている。特に前者は民謡を素材にしているが、聴き手はむしろ、ハリスのアクの強い料理法に興味が湧くだろう。作品1のソナタは、当ディスク中とりわけシリアスで、パリでナディア・ブーランジェに学んでいた頃に書いた作品とは信じがたいほどの個性がある。初録音の4曲は、いずれも未出版の作品。年代の分かる最後の作品となった《オーケストレーション》は、あつという間に終わってしまうのだが、その堂々とした響きには、彼が自己の作風につねに忠実だったことが分かる偉大なる遺産だ。

Harris, Roy



ロイ・ハリス/ピアノ 作品全集

(ピアノ・ソナタOp.1, 小さな組曲, アメリカのバラード第1, 2集, 3楽章のピアノ組曲, トッカータ, アメリカ民謡《真実の愛、泣かないで》による変奏曲, 無題, 3楽章のピアノ・ソナタよりスケルツォ, シャーリーのハッピーピース, オーケストレーション)

ジェフリー・パールソン
(p)

〈録音: 2009年6月〉

[Naxos©8.559664]